

## 主 題：罪と向き合う5

## 聖書箇所：ローマ人への手紙 6章11-14節

私たちはローマ人への手紙6章を学んでいます。大切なパウロのメッセージを見て来ました。ある人たちはパウロの語った福音のメッセージに反対しました。「恵みによって救われる」というこの至宝のメッセージに彼らが反対したのは、「主なる神の恵み」、また、「救いについて」彼らが正しく理解していなかったからです。彼らは「罪は赦されるのだから何をしても構わないのではないか。好きなように生きて楽しめばそれで良い。そのような人たちは増えて行くに違いない。もし、パウロがこのようなメッセージを語り続けて行くのであれば…」とそのように言って彼らはパウロの福音に反対をしたのです。そのことはもうすでに私たちは3章で見て来ました。そこでパウロは、反対する人々の反論を想定して、それに答えるという形で、この読者たち、信者たちに確信をもたらそうとするのです。そのことを私たちはこの6章1節から見て来ました。思い出してください。

パウロがした最初の質問、彼はこのような質問を想定しました。1節「**それでは、どういうことになりませんか。恵みが増し加わるために、私たちは罪の中にとどまるべきでしょうか。**」、つまり、罪が赦されることによって神のすばらしさが明らかにされるのなら、私たちはもっと罪を犯すべきだ、そうすれば神のすばらしさを証する機会を神に提供することになるから、だから、罪を犯すことは実は神にとって役立つことをしているのだと、このような質問を想定したのです。そして、パウロ自身、このような間違った教えに対して真っ向から反対するのです。「**絶対にそんなことはありません。**」と2節にある通りです。なぜなら、イエス・キリストを信じて神の恵みによって救われた者たち、本当にイエス・キリストを信じた信者たちは、これまでと同じように生きることが出来ないからです。これまでと同じように、平気で罪の中を歩むことは出来なくなったのです。なぜなら、イエス・キリストを信じる者たち、クリスチャンは新しい人であり、生まれ変わった人だからです。かつての自分は死んで、新しく生まれ変わったのです。そのことをパウロはこの6章の2節から10節で教えてくれたのです。

その上でパウロは、11節から14節で、生まれ変わった私たちはどのように生きて行くべきかについて教えるのです。それは簡単に言えばこういうことです。パウロが期待した信仰者としての生き方、信仰者がどのように生きて行くことをパウロが望んだのか、ひと言で言えば、それはキリストが生きただよように生きるということです。11節は「**このように、**」という副詞で始まっています。パウロがこれまで語って来たことをこの11節で要約しようとするのです。彼はこのように言います。「**あなたがたも、自分は罪に対しては死んだ者であり、神に対してはキリスト・イエスにあって生きた者だと、思いなさい。**」と。パウロはこれまで教えて来たことをここで要約しました。「クリスチャンは罪に対して死んだ者であり神に対して生きた者だ」とパウロは言うのです。私たちはすでに見て来ました。皆さんもよく覚えておられることと期待しますが、簡単に復習しましょう。

## ☆本当のキリスト者とは？

## 1. 罪に対して死んだ者 2節、6節

・ 古い人がキリストとともに十字架につけられた

2節「**罪に対して死んだ私たちが、どうして、なおもその中に生きていられるでしょう。**」、また、6節にもそれに関することがこのように語られています。「**私たちの古い人がキリストとともに十字架につけられた…**」とあります。イエス・キリストを信じている者たちは「罪に対して死んだ者」だと言います。言い方を変えるなら、「古い人が十字架で死んだ」ということです。つまり、6節でパウロが言った「**古い人がキリストとともに十字架につけられた**」というのは、救われる前のかつての自我、罪の赦しを受けていない自分、神に逆らい続けて来た自己中心の自分、救われる前の私のすべてが死んだ、アダムにある人として神に逆らい続けて来た自分、自己中心的な自我、すなわち、これまでの私が死んだと、そのことをパウロはこの6節で言ったのです。私たちイエス・キリストを信じる者たちは、罪赦されたときに、かつての古い人が新しい人と取って代えられたのです。私たちは生まれ変わったのです。そのことをパウロは「**私たちの古い人がキリストとともに十字架につけられた…**」ということばで教えてくれたのです。

・ 罪のからだが減びた

もう一つ、6節に「**罪のからだが減びて、**」とあります。罪によって支配されてきたからだが減びて、つまり、無効にする、無力にするという意味です。罪に支配されてきたからだがその支配から解放されたという意味でした。だから、イエスを信じる者たち、また、信じる者たちだけが、神の栄光のためにそのからだを用いることが可能になったのです。救われる前は「罪によって支配される」というその選

択しかありませんでした。しかし、その罪の支配から解放されることによって、私たちは神のために生きることが出来る者になったのです。

ですから、パウロはクリスチャンは「罪に対して死んだ者」である、しかも、そのことに関して「古い人が十字架に架けられた」、「罪のからだが減んだ」ということばによって説明をしてくれたのです。

## 2. 神に対して生きた者

次に、クリスチャンは罪に対して死んだだけでなく「神に対して生きた者」であると11節で教えています。クリスチャンは主イエスとともによみがえることによって、罪の支配、罪の束縛から解放された者です。主イエスが罪に勝利されたことによって、私も罪に勝利することが出来る者となったのです。かつて、私たちは罪に対して無力だったのです。どうすることも出来ませんでした。しかし、イエス・キリストがああ死からよみがえってくださり、その死の力に打ち勝たれたことによって、私たちも同じ勝利をいただいたのです。私たちは死に対しても、また、私たちを虜にしていた罪の力にも勝利することが出来る者に生まれ変わったのです。ですから、これから見て行きますが、クリスチャンの皆さん、あなたはこのことを覚えなければいけないのです。あなたは生まれ変わったと言います。つまり、あなたはこのような者に変えられたのです。これまで罪を犯すこと、すなわち、神に逆らい続けることしか出来なかった者が、神に従い神を喜ばせることが出来る者へと生まれ変わったのです。救われたあなたは神を喜ばせることが出来る者になったのです。また、神のみこころに逆らい続けて来たあなたが、みこころに従うことが出来る者へと生まれ変わったのです。神の栄光を汚すことしかできなかったあなたが、神の栄光を現わすことが出来る者へと生まれ変わったのです。サタンに仕えて来たあなたが、主なる神に仕える者へと生まれ変わったのです。あなたが救われたときにこのすべてのことがあなたに起こったのです。だから、生まれ変わったと言うのです。

そして、救われた私たちは「主に仕える者」になったのです。クリスチャンの皆さん、私たちはそのために造られたのです。私たちの創造主が私たちの主であり、私たちはそれに仕える奴隷です。そのことはパウロがこのローマ人への手紙の中で繰り返し私たちに教えていることです。しかし、残念ながら、生まれながらに私たちはその本来の主人である神に仕える者ではなくて、偽りの神に仕える者としてこれまで人生を過ごして来ました。サタンに仕えて来たのです。しかし、生まれ変わることによって、創造されたその目的に沿った、本来の主人である唯一真の神に仕える者へと変わったのです。変えられたのです。ですから、私たちクリスチャンは、言い方を変えるなら、神に仕える者です。明らかに、イエスを信じる前とは異なる生き方が出来るようになったのです。

そこで、パウロはそのすばらしい救いをもう一度教えた上でこのように言います。11節「このように、あなたがたも、」と。10節ではイエス・キリストがどのように歩まれたのかということ語っています。「なぜなら、キリストが死なれたのは、ただ一度罪に対して死なれたのであり、キリストが生きておられるのは、神に対して生きておられるのだからです。」、イエス・キリストは神に対して生きている、だから「このように、あなたがたも、」と言うのです。つまり、パウロが望んだことは、救われた私たち、神の恵みによって救いにあずかった私たち、生まれ変わった私たちは、このキリストが歩まれたように歩んで行く者になったのです。ですから、神は、当然そのように生きることを私たちに望んでおられるのです。

パウロのことばを思い出しませんか？ Iコリント11：1で「私がキリストを見ならっているように、あなたがたも私を見ならってください。」と言いました。パウロにとって、イエス・キリストが歩まれたように私もその歩みに倣って生きる、それが彼の願いでした。イエスが生きられたように私も生きて行きたい、イエスが歩まれたように私も歩んで行きたいと。ただ違う点は、イエスには罪がなかったことです。私たち信仰者は悲しいことに、罪との戦いを日々経験し、罪に対する敗北も経験しています。しかし、パウロは「イエスさまが私の人生の歩みの目標です。イエスさまが歩まれたように私も歩んで行きたい。」と、そのようにこのIコリントの手紙の中で告白しているのです。ですから、私たちは生まれ変わった、生まれ変わったあなたはキリストが歩まれたようにそれに倣って歩んで行きなさいと、このようにパウロは教えていますが、同時にパウロは、では、どうすればそのような歩みが出来るのか、そのカギをも教えてくれるのです。見てください。11節の最後にこのような動詞が出て来ます。「思いなさい。」と。非常に面白いことばです。「考える、心を留める、熟考する、よく考える、評価する」という意味をもったことばをパウロはここで使うのです。つまり、パウロがここで言わんとしていることは、もし、あなたがキリスト者としてクリスチャンとして相応しい新しい生き方を送って行こうとするなら、その秘訣は「考えること」だと言っているのです。「考えなさい」と言います。すなわち、パウロはこの6章で救いがどんなにすばらしいものであるかを話して来ましたが、その事実を正しく正確に理解しなさい、そのために考えなさいと言うのです。しかも、それだけではありません。その「考えたこと」を考え続けて行きなさいと言います。だから、この「思いなさい」という動詞は現在形なのです。私たちに必要なことは、この神の真理を正しく理解するだけでなく、その真理を忘れることなく継続して覚え続けて行くこ

とです。

私たちは「**自分は罪に対しては死んだ者であり、神に対してはキリスト・イエスにあって生きた者**」だということをしっかり覚えなければいけません。つまり、この救いがどんなものか、どんなにすばらしいものか、どのような祝福を神は私に与えてくれたのか、そのことを正しく理解し、それに対する感謝を忘れない、そのことをパウロは教えているのです。しかし、パウロはそのような真理を教えているのですが、同時に、この教えをすぐに疑ってしまう人たちがいることも知っているのです。先ほどから見てるように、クリスチャンは神に仕える者として生まれ変わったと言っています。ということは、主に仕える人生がスタートしたのです。主を証する人生がスタートしているのです、主を礼拝する人生がスタートしたのです。主の栄光を現わす人生がスタートしたのです。でも、多くの人たちは「私は主に仕えることが出来ません。私はダメなクリスチャンです。神さまは私のような者を用いてくれません。」と、聖書が教えていないことを勝手に信じて、そして、自分はダメだと考えているクリスチャンが多いのです。皆さんがそうでないことを期待します。イエスを信じたすべての人が、神のおことばをしっかり覚え、そのみことばに添って生きて行くなら大変なことが起こります。神の栄光が現わされて行きます。そうすると、サタンにとってそれは一番うれしくないことです。だから、サタンがすることは「偽りの主人」として皆を惑わすのです。皆さんが神の真理を受け入れないように騙すのです。だから、聖書からあなたに与えられている神の約束を聞いても、サタンは「この約束はあなたに対する約束ではありませんよ！なぜなら、あなたの信仰は弱いし、失敗を何度も犯しているから、これはあなたに対するものではないですよ！」とささやくのです。そのような人はおられませんか？私なんてダメだと思っている人は？

もしそうなら、パウロのことばを聞かなければいけません。パウロは「よく考えなさい」と言います。神があなたのために為してくださったその救いのみわざをしっかりと考えて、それを考え続けなさい、それをしっかりと熟考しなさい、よく考えていなさいと。いったい、神はどのように大きな恵みをあなたに与えてくださったのか、そのことをしっかりと正しく理解して、覚え続けて行くことが必要なのです。それが新しく生まれ変わった者として、正しく歩み続けて行くための秘訣だと言うのです。

皆さん、そのように思われませんか？心から神の恵みを喜び、感謝しているなら、それに相応しい応答がその人の内側から自然と湧き上がって来るはずです。心から感謝しているならそれはいろいろな形になって現われて来ます。ですから、周りの人々が見ていても、この人は感謝しているのだということが分かります。私たちが神に仕えて行くためにも、私たちの心の中がその神に対する感謝にあふれていなければ長続きはしません。でも、私たちの心が感謝に満たされているなら、それは「主に仕えて行こう」という動機を生み出し、そして当然、行動を生み出して行きます。私たちが考えなければいけないことは、今私は、神が私に対して為してくださった救いのみわざに感謝しているかどうかです。それとも、それはもう忘れられたものであって、いつの間にかあなたの神に対する感謝も形だけの冷え切ったものになってしまっていないかです。

一つの例を旧約聖書から見てみましょう。詩篇 116 篇、この著者は大変な困難に直面していたようです。詳しい説明はなされていませんが、3 節には「**死の網が私を取り巻き、よみの恐怖が私を襲い、…**」とあります。「死」ということばがあるからといって著者は死の床にいたとは解釈しません。なぜなら、その後のみことばを見ると、「**私は苦しみと悲しみの中にあっただ。**」とあるからです。ですから、彼は全く希望の見えない状態、絶望のどん底にあっただのでしょう。これは時代がどうであれ、私たちもみな経験することではないかと思えます。もしかすると、今そのような状況にいる方がおられるかもしれません。いろいろなこと、それは仕事かもしれないし、家庭の問題かもしれないし、人間関係かもしれないし、病かもしれないし、様々な事柄が皆さんから希望を奪ってしまっていて全く光が見えなくなってしまう、いつの間にか喜びがなくなってしまう、感謝がなくなってしまう、そのような状態です。そして、今喜んでいても次の瞬間に落ち込んでしまう可能性もあります。私たちは自分の思い通りに物事が進んで行かないと喜べない者です。そのような私たちの姿を思い浮かべながらこの詩篇 116 篇のみことばを見てください。大変な絶望の中にあるこの著者は、どのようにそれに対処したのでしょうか？彼は希望を失っているのでしょうか？失っていません。なぜなら、4 節に「**そのとき、**」とあります。大変な状況にあった「**そのとき、**」に彼は何をしたのでしょうか？「**私は主の御名を呼び求めた。**」とあります。彼は神にその助けを求めに行くのです。非常に面白いと思ったのは、なぜ、この著者はこの大変な中で神のところに助けを求めに行ったのでしょうか？なぜ、周りにいる霊的な人のところに助けを求めに行かなかったのでしょうか？信頼する人に助けを求めに行かなかったのでしょうか？それは、神だけが解決を与え、神だけが希望を与えてくださる方であると知っていたからです。悲しいことに、私たちの問題は本当の希望を与えてくれる神のところではなくて、それ以外のところに解決を求めに行くことです。それゆえに、本当の解決を得ることがないのです。この詩篇の著者は人ではなく神の約束に信頼を置いています。4 節 b 「**主よ。どうか私のいのちを助け出してください。**」、5-6 節「**主は情け深く、正しい。まこ**

とに、私たちの神はあわれみ深い。:6 主はわきまのない者を守られる。私がおとしめられたとき、私をお救いになった。」と、神はこのようなお方だと、その確信をもって彼は神に信頼を置いています。確かに、私たちの人生にはいろいろなことが起こります。でも、カギはその中であって主を信頼するかどうかです。主は信頼に値する方です。なぜなら、神は皆さんの周りに起こっているすべてのことをご存じで、そのすべてのことをみこころであれば解決することも出来るからです。神に不可能なことは何一つありません。それなら、私たちはその方のところにすべてのことをもって行けるといふ、このような祝福をいただいているのです。残念ながら、私たちはその祝福を用いていないのです。神のところに行けるのに神以外のところを私たちは選択してしまうのです。でも、この著者は違いました。大変な状況の中、彼は神に助けを求めに行きました。そして、彼は神に信頼を置きました。彼は知っていたのです。この困難の中であって自分を助け救いを与えてくれるのは人ではなくて主だけだと。だから、彼は人ではなく神に助けを求めて行くのです。10節「**私は大いに悩んだ。**」と言ったときも、**私は信じた。**」、私は神を信頼すると言います。そして、12節では「**主が、ことごとく私に良くしてくださったことについて、私は主に何をお返ししようか。**」と言っています。彼は神に対して感謝をささげて行くのです。この12節は実は質問です。「**私は主に何をお返ししようか。**」と問いかけて答えがありません。この著者は神が自分のために為してくださったそのすばらしい祝福、恵みを覚えたときに、これに対して私は何をもって答えようかと問いかけるのです。しかし、それに対する答えがここに記されていないという理由は、彼がよく分かっていたからです。それは主が為してくださったことに見合う、釣り合うお返しは何もないということを知っていたからです。神が為してくださったことは余りにも犠牲に富んでいて、余りにも大きすぎて、それに見合うお返しは私には出来ないと。そこで彼は神に感謝をささげたのです。13節「**私は救いの杯をかかげ、主の御名を呼び求めよう。**」、すばらしい信仰者です。問題の中にあっても、神を見上げ神を信頼し、そして、神に感謝をささげたのです。この著者は分かっていたのです、覚えていたのです。神がどんなにすばらしい方か、どんなに私に良くしてくださったのか、私のような者をどれ程愛してくれているのか、そのことをしっかりと分かって忘れていなかったのです。

神から大きな祝福をいただいたすべての人がみな同じように対応するのかということ、そうではありません。覚えておられますか？ヒゼキヤという一人の王のことを。彼は死の床にいました。預言者イザヤがやって来て彼と話をしますが、ヒゼキヤが望んだことは神のあわれみでした。神はあわれみをもって彼のいのちを15年延ばされました。そのようなすばらしい祝福をいただいたヒゼキヤですが、彼に関してⅡ歴代誌32:25にこのように記されています。「**ところが、ヒゼキヤは、自分に与えられた恵みにしたがって報いようとせず、かえってその心を高ぶらせた。そこで、彼の上に、また、ユダとエルサレムの上に御怒りが下った。**」と。神のすばらしい祝福をいただいているながら、神の前に謙虚になって感謝をささげようとしなかったのです。彼は神に信頼するのではなく自分の力、人間の力に信頼したのです。だから、ある人は先ほど見た詩篇の著者のようではなく、神を信頼して神に感謝をささげようとしません。神のすばらしいみわざを覚えて感謝をささげるのではなく、神のすばらしいみわざを忘れて、自らの心を高ぶらせてしまうのです。感謝がなかったのです。神に信頼を置こうとはしなかったのです。悲しい結末です。いろいろな人が存在するのです。正しい選択をする人もいますし、そうでない人もいます。私たちが覚えておきたいことは詩篇103:2のみことばです。「**わがたましいよ。主をほめたたえよ。主の良くしてくださったことを何一つ忘れるな。**」、このように私たちは生きるべきです。主が私たちにどれ程の恵みをくださったのか？そのことをしっかりと覚えながら私たちは歩んで行きたいものです。パウロはこのローマ書6章の中でこのように言っているようです。「**信仰者よ、救いの恵みのすばらしさを決して忘れるな！そして、主に感謝し、主を誉め称える人生を送り続けて行きなさい！**」と。

神の恵みを忘れてはいけなと、そのことを語ったパウロは、今度は12節から14節に「**救われた者としての相応しい生き方**」を具体的に教えてくれています。二つの生き方を教えています。

#### ☆救われた者としての相応しい生き方 12-14節

##### A. 賢明な選択をする 12-13節

12節「**ですから、あなたがたの死ぬべきからだを罪の支配にゆだねて、その情欲に従ってはいけません。**」

##### 1. 罪の支配を許さない 12-13 a節

最初に彼が言うことは、罪の支配を許してはいけな、罪があなを支配することを許してはいけなということです。この12節の「**罪に支配にゆだねて、**」の「**支配**」とは「**王として治める**」という意味です。ですから、パウロは罪が自分を再び王として支配するようなことを許してはいけなと言うのです。なぜなら、罪はもう私たちの主人ではなくなりましたからです。私たちの王ではなくなりましたからです。王でない者を再びその王座に迎えることは間違っていると申すのです。神学者のジョン・マレーが言うように、「**奴隷としてふるまうな！**」ということです。私たちは罪から自由にされた者として、永遠の滅びから自由にされた者として生きて行くことが必要だと言うのです。

## (1) 罪に支配させない 12節

ここで私たちが覚えておきたいことがあります。このメッセージは確かにクリスチャンに対するものですが、そのクリスチャンに「**あなたがたの死ぬべきからだを罪の支配にゆだねて、その情欲に従ってはいけません。**」と命じた理由は、このような危険性が信者にあるからです。クリスチャンはこのような生き方を絶対にしないとすれば、この命令は馬鹿げています。でも、このような命令を与えたということは、気をつけていなければそのような生き方をしてしまう可能性があるからです。また、「死ぬべきからだ」とありますが、このことばがここに特出されているのは、「死ぬべきからだ」がまだ罪の攻撃を受けるからです。私たちのこの罪のからだ、この肉がかつての罪との戦いを継続しているのです。パウロはローマ7：15でこのように言っています。「**私には、自分のしていることがわかりません。私は自分がしたいと思うことをしているのではなく、自分が憎むことを行なっているからです。**」、納得されるでしょうか？クリスチャンの皆さん、私たちは残念ながら、まさにこのパウロが言ったことにアーメンと言うのです。「パウロと同じだ、救われていながらなぜなのか？」と。残念ながら、私たちにはこの「死ぬべきからだ」がまだ存在しているのです。救われていながら、かつての生き方、罪の生活に引き戻そうとする誘惑が存在し、その誘惑を私たちは日々経験しているのです。だから、パウロが待望していたこと、待ち望んでいたのは「たましいが贖われること」ではなく「**からだ**が贖われること」でした。ローマ8：23では「**そればかりでなく、御霊の初穂をいただいている私たち自身も、心の中でうめきながら、子にさせていただくこと、すなわち、私たちのからだの贖われることを待ち望んでいます。**」と言っています。新しい栄光のからだに変えられることを待っていたのです。他の部分は大丈夫でした。このからだが新しく変えられることが必要だったのです。なぜなら、そのときに私たちは罪から完全に解放されるからです。でも、その葛藤を経験する私たちはその葛藤の中で何度も敗北を喫して来ました。

しかし、私たちクリスチャンが覚えておかなければいけないことは、私たちは新しい歩み出来る者へと生まれ変わったということです。クリスチャンの皆さん、あなたが何度も罪に敗北し、そして、もし、あなた自身が落胆しているなら、しっかり目を覚ましてください。そのような罪との葛藤を経験しているのは、あなたのうちに聖霊なる神がおられるからです。神は何度までなら私たちの罪を赦してくださいるのでしょう？「七の七十倍」とペテロに対してイエスは言われました。神は何度でも赦してください、それが神です。それが私たちの父なのです。もし、あなたが失望しているなら、神の恵みがよく分かっていないのです。感謝して、神の助けをいただきながら歩み続けて行くことです。そのことはこの後でパウロが教えています。私たちは生まれ変わったのです。悲しいけれど、罪に敗北することが多々あるけれど、私たちは新しい歩みを為すこと、神に喜ばれることが出来る者へと生まれ変わっているのです。

## (2) 罪に仕えない 13 a 節

罪の支配を許してはならないと言ったパウロは、「罪に支配させてはならない」というだけでなく13節では「**罪に仕えてはならない**」と言います。13節の初めをご覧ください。「**また、あなたがたの手足を不義の器として罪にささげてはいけません。**」とあります。この「**器**」ということばは「武器、道具」と訳されます。ですから、パウロはここでからだの各部分を不義の武器としてささげてはならない、不義のために用いられるようなことがあってはならない、罪のために用いられるようになってはならないと言うのです。もしそうであるなら、私たちは悲しいことに人々に祝福をもたらすことはありません。もし、私たちが不義の器として、武器として用いられて行くなら、悲しいことに、祝福ではなく様々な問題をもたらす、そのような信仰者になってしまいます。主は私たちの信仰が成長し、キリストのからだが増えて上げられて行くことを望んでおられますが、そのようなことを妨げる働き人になってしまうのです。だから、「罪に仕えてはいけません」と言うのです。あなたのからだの各部分を「**不義の器**」として、不義の道具、不義の武器としてささげてはならないと言うのです。

罪の目的は何でしたか？神に逆らうことによって神の栄光を汚すことです。1章で見た通りです。だから、そのような人になるのではなくて、かつてはそうだったけれど、救われたあなたがまた同じように神の栄光を汚すことがあってはならない。かえって、神の武器として義の武器となって行きなさいと言うのです。考えてみると、神の一方的な犠牲と恵みによって救われた私たち信仰者が、なぜ、再びこの神を悲しませ、この神の栄光に泥を塗るような生き方を選択しようとするのかです。あってはならないことです。神の敵であるサタンの目的を果たすために自分をささげてはならない、再び、罪をあなたの王として主人として仕えてはならないと言うのです。罪から離れなさいと言います。そのことをパウロは具体的な歩みとして教えたのです。どんな罪でも赦してはいけません。

## 2. 神の支配を求める 13 b 節

そして、彼は13節の後半に、今度は神の支配を求め続けて行きなさいと教えます。罪の支配を許さないだけでない、神の支配を求めなさいと言うのです。13 b 節「**むしろ、死者の中から生かされた者とし**

て、あなたがた自身とその手足を義の器として神にささげなさい。」、新しく生まれ変わった者としてそれに相応しく生きて行きなさいと言います。不義の器が義の器として神によって用いていただけるのです。不義の武器が神の武器として神の目的を果たすために用いられるのです。感謝だと思いませんか？信仰者の皆さん、サタンが何を言おうと、神のメッセージは救われたあなたを神はご自身の目的のためにお使いくださるということです。それが約束です。そのことをパウロは私たちに約束してくれたのです。そのために必要なことは、私たちは罪から離れなければならないし、同時に、私たちは神に助けを求めなければいけないのです。神に用いていただくためには、私たちに神の助けが必要なのです。そのためには、救われたことを、そして、この救いを正しく理解して、それを心から喜び感謝しているなら、この方に喜んで用いていただきたいと自らをその方にささげることは難しくありません。

救いのすばらしさが分かっているのなら、パウロが言わんとしていることは分かりますね？パウロは「考えなさい」と言ったのです。あなたがどれ程祝されているのか、恵まれているのか、どのような犠牲が払われているのか、どれ程愛されているのか、そのことを考え続けているのなら、それに相応しい生き方が生まれて来ると言うのです。私たちの問題は、すぐにそのことを忘れてしまうことです。神はあなたを義の器として神の武器として使おうとしているのです。しかし、賢くならなければ私たちは神の武器ではなくて、不義の武器として用いられることもあるのです。だから、しっかりと何が正しいのかを見極めて、正しい選択をしなければいけないと言うのです。

皆さんはどうですか？あなたは神の器として用いられることを願っておられますか？そのために神はあなたを救ってくださったのです。あなたの信仰者としての歩みは神のすばらしさを証する器として用いていただいていますか？先日のカンファレンスで、私はあるご夫妻と同じテーブルに座りましたが、そのご主人がこのように言われたのです。「今日は私が定年になってから丁度20年を迎える記念日です」と。その方は定年前は教会で熱心に主に仕えておられましたが、定年以降のこの20年間は何をして来られたのでしょうか？彼は定年を迎えたとき宣教師になりました。年金で生活が出来る、年金で宣教師としての活動が出来ると思っていましたが、足りなかったのです。それでご夫妻はいろいろな教会を回って、このような働きがしたいから支援して欲しいとデピューテーションに出てサポートを集めました。アメリカでは多くの人がキャンピングカーを使ってよく旅行をしますが、そのキャンピングカーが停まること出来る公園があるのです。彼らはそこへ出かけて行って、そこで泊まっている宿泊客にキリストを伝えたとのこと。それが彼らの働きです。定年を迎えて20年になるとのこと、私は聞きました。「今、おいくつですか？」と、「80歳になりました」。彼らは20年間、宣教師として足を引きずりながら各地を回っておられるのです。一人でも多くの人たちにこの神の福音を伝えたいという思いをもって…。彼らこそ神の器として用いられていると思われませんか？

果たして、私たちの人生を私たちはどのように使っているでしょう？神はこのような者へと私たちを生まれ変わらせてくださったのです。神の器として、神の武器としてあなたは生きておられるでしょうか？感謝なことは、神はあなたを使ってくださる、でも、そのためには「私を使ってください」と神にあなた自身を委ねなければいけません。パウロが私たちに語ってくれることは、罪から離れることだけでなく、神の前に神の支配をいただいて歩み続けて行くことが必要だということです。

そして、最後に14節を見ますが、思い出すみことばがあります。パウロがこのように言っている箇所です。ローマ14：8「もし生きるなら、主のために生き、もし死ぬなら、主のために死ぬのです。ですから、生きるにしても、死ぬにしても、私たちは主のものであります。」、そのように生きたいものです。私たちの人生は主のものであります。生かされているこの残された日々を、神の器として、神の武器として生きて行きたいものです。「賢明な選択をなさい」と言ったパウロは、二つ目に「恵みによって生きなさい」と教えます。

## B. 恵みによって生きる 14節

14節「**というのは、罪はあなたがたを支配することがないからです。なぜなら、あなたがたは律法の下にはなく、恵みの下にあるからです。**」、ここで使われている「**支配**」も「主人である、支配権を有する、また、〇〇の上に支配権を行使する」という意味です。罪がもう「**あなたがたを支配することがない**」というのは、もう、罪は私たちの主人にならないからです。罪は私たちの上に支配権を行使することは出来ないのです。罪はもう私たちの主人でなくなったのです。私たちが救われたから、生まれ変わったからです。

### 1. 律法の力：あなたがたは律法の下にはない

そして、彼はこう言いました。「**なぜなら、あなたがたは律法の下にはなく、**」と。律法はすばらしいものです。律法は聖いものです。律法を見ることによって、私たちは神のみこころを知ることができます。残念なことは、このすばらしい律法は、私たちにあって一番必要な罪の赦しをもたらすことがないのです。同時に、この律法は私たちが変えられて行くために必要な力をもたらしません。私たちは律法によっては変えられないのです。

### 2. 恵みの力：あなたがたは恵みの下にあるからです



ところが、恵みはどうでしょう？恵みは私たちに救いをもたらしてくれます。また、恵みは私たちを変えて行ってくれるのです。だから、パウロが言ったように「**あなたがたは…恵みの下にあるからです。**」。罪が赦され、そして、あなたがたは日々この主の力によって変えられて行くと言うのです。

今日、私たちが学んで来たことを思い出してください。私たちも新しい歩みを為すことが出来るのです。新しい人生を送って行くことが出来るのです。なぜなら、私たちがそのことを可能にしてくれる恵みの下にあるからです。コロサイ人への手紙3：10に「**新しい人を着たのです。新しい人は、造り主のかたちに似せられてますます新しくされ、真の知識に至るのです。**」と記されています。「**新しい人を着た**」、私たちは新しくなったと言います。そして、「**新しい人は、造り主のかたちに似せられてますます新しくされ**」て行く、私たちは変えられて行くと言うのです。

#### ◎新しい人とはどのような人でしょう？

新しい願いを持っている人：神を喜ばせたいという願いです。

新しい目的を持っている人：神の栄光を現わして行きたい、そして、そのためにみこころを行なって行きたいという願いです。

新しい価値観を持っている：救われる前はこの地上のことばかりを求めて来ました。財産や名誉、快樂などです。でも、私たちはそれよりも遥かに優れたものを見出したのです。イエス・キリストです、この救いです。

時間に関する考え方が変わった：かつては、今だけ、今が楽しければそれで良いと、そのように考えて来た私たちが、永遠のための備えをしようと、そのような人に変えられたのです。

神の目を意識する：また、かつて私たちは人のことが気になっていました。人の目を意識しながら生きて来ましたが、私たちは救われることによって神の目を意識して生きる者へと変えられたのです。

新しい特徴：そして、先に見たように、コロサイ3：10「**造り主のかたちに似せられてますます新しくされ**」て行きます。「**新しくされ**」は現在形です。継続して新しくされて行くのです。だから、新しくされた人は「新しい特徴」を持っている人です。その人はキリストに似た者へと継続して変えられて行くからです。

私たちは新しい人になった、生まれ変わったと言います。しかし、新しい人として私たちが日々変えられて行くその力はどこから来るのでしょうか？このみことばが教えてくれます。「**新しくされる**」という動詞は現在形であると見ました。継続してそのように新しくされて行くで見ました。同時に、この動詞は「受け身」なのです。神があなたを変えて行ってくれるのです。神があなたを新しく変え続けて行ってくれるのです。だから、私たちはその「恵みの神」の助けをいただきながら歩み続けて行くのです。

私たちはパウロが言ったように「**恵み下に**」あります。そして、この恵みによって私たちは生まれ変わった者としての歩みを為すことが出来るようになったのです。クリスチャンの皆さん、これが神があなたにくださったすばらしい祝福です。私たちはだれ一人として「では、罪の中を継続して歩みましょう。」とは思いません。罪との戦いがあり、罪との戦いの中で敗北を経験することも度々あります。しかし、私たちは生まれ変わった者として、神の栄光を現わしたい、神に喜ばれたい、神のすばらしさを人々に伝えたいと願って歩んでいる者です。神があなたを祝して下さって、神があなたに力を与えて下さって、その願いを益々強めてあなたを導いてくださるよう心から願います。

どうぞ、神の器として歩み続けてください。私たちのこのように偉大な神のすばらしさが人々に伝わり続けて行くために。